

令和2年度 研究年報

国立大学法人
滋賀大学教育学部
附属特別支援学校

対話を通して学び深める
授業づくり

～「なりたい自分」になるために～

研究年報の刊行によせて

コロナ禍の令和2年は、年度当初の休校でのリモート授業からスタートし、予防策の確立を模索しつつ行事を見直し夏休みを短くして、ようやく実現した学校生活でした。何が大事で、どう取り組めばいいのか、世界中で“教育”の根っこが問われる一年でした。そんな中、平成30年度から本校で取り組んできた「生き抜く力の育成」を標榜する研究を発展させ、“止められない教育”として今年度私たちが唱ったテーマが「対話を通して学び深める授業づくり～『なりたい自分』になるために～」でした。

発達課題別グループを小中高の縦割りで組織し、個々の児童生徒の発達と異校種の視点を持ち寄り、「アイデアシェアタイム」「めっちゃしゃべれる研究会」で授業づくりのPDCAサイクルを円滑化、リモート授業で身につけたAI技術で大学の先生方に平時から繋がって研究に取り組みました。そこから得られた情報を、「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」の3つの対話で整理、「なりたい自分」になる為の授業づくりの成果と課題を検証し、本年報にまとめました。

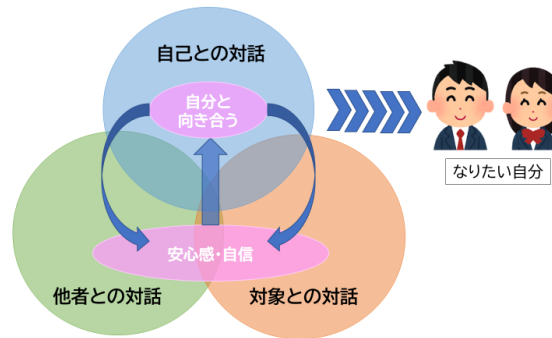
“教育”の根っこに通じる示唆を含むものと自負しております。ご一読いただき、みなさまと“止められない教育”を進めていければと思います。

テーマ設定理由 ～なりたい自分とは？～

本校では、平成30年度より授業づくりをテーマに、授業力の向上を図るとともに、新学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」を中心に研究を進めている。

昨年度までの研究では、「もう一歩踏み出せる力」「自己発展し続ける子ども」を『向上心』というキーワードでまとめ、各学部でテーマを設定し、学部研究を深めてきた。その中で、高等部卒業段階で「なりたい自分」を導き出すには、他者の存在に心地よさを感じ、安心できる仲間と経験を広げ、他者の良さに気づくことが大切であり、そうすることで「ありのままの自分」「自分のよさ」も受け止められようになる。そうした自己理解へつなげるためには、昨年度の研究で注目した「対話」の力が重要であると考えた。

対話は「①対象（教材・教具）との対話」「②他者（教師・生徒・地域の人など）との対話」「③自己との対話」という、3つの視点で見ることができ、人と人との話し合いや言葉を使った対話だけでなく、様々な捉え方をすることが大切であることを確かめてきた。子ども達は、対象（教材・教具など）や他者（教師、友だち、地域の方など）との「さまざまな対話」を通して安心感を高め、自信をつけていく中で「自己との対話（自分と向き合うこと）」を積み重ね、自分の思いを発信していく。そうした繰り返しの中で、「なりたい自分」を見つけ、実現に向けて歩み出すことができるようになった。



研究の目的・方法

1. 発達課題別グループでの研究を通して、授業づくりのサイクル<PDCA>の円滑化を図る。

A 発達年齢1.5歳程度～4歳程度まで



B 発達年齢5～8歳程度



C 発達年齢9～14歳程度



★人数は、グループの発達年齢に該当する児童・生徒数

本校は全校生徒59名と小規模校であり、教員数も少ない。そのため、研究グループの細分化が難しい実情があり、今年度は大きく3つのグループ（A:発達年齢1.5歳～4歳程度まで、B:5歳～8歳程度まで、C:9歳～14歳程度）に分かれて授業検討・事後研究を行った。小学部にはCグループに該当する児童は在籍していないが、小中高の縦のつながりを考慮して研究メンバーを配置、小学部でも研究授業を行った。また、学習によっては、幅広い発達年齢の子ども達が共に学習する授業もあるため、各グループに相当する発達年齢の児童・生徒に焦点をあて話し合いをすることにした。

PDCAサイクルの円滑化を図るため、昨年度までの事後研究会に加え、新たに授業検討会であるアイデアシェアタイムを導入し、子ども達の実態の共有と授業計画について話し合う時間を設けた。また、昨年度まで行ってきたRound Studyの手法をアレンジした事後研究会「めっちゃしゃべれる研究会」を設定した。

4月当初の計画では、アイデアシェアタイムとめっちゃしゃべれる研究会をセットに数回繰り返す予定をしていたが、コロナウイルスによる緊急事態宣言に伴う休業により、このサイクルを繰り返すことが非常に難しくなってしまった。そこで、今年度は夏休みを利用し教員全員がアイデアシェアタイムを経験し、本校独自のスタイルを模索する1年になった。

アイデアシェアタイム

めっちゃしゃべれる研究会

1. 授業構想を練る
2. 授業検討会
3. 指導案作成
4. 研究授業
5. 事後研究会
6. まとめ

2. 授業における対話に着目し、子どもの成長や自己理解へと導くための対話について検証する。

昨年度考えた「対話」を通じた自己理解や「なりたい自分」の形成について、まずは授業中にどのような対話が行われているのか、授業の中での「すてきな対話」を見つけることから始めた。

言葉での表現が難しい子ども達が言葉を使わず対話するのはどんな授業場面なのか、言語力のある子ども達の自己理解を促すような対話にはどのような題材が効果的かなど、実際の授業の中で見られたたくさんの対話する場面を収集、分析することで研究グループごとの共通点をまとめた。



授業検討会 アイデア シェアタイム

本校で作成した「授業デザインシート」を使い、指導案前の授業案（単元計画）を検討する会を設定した。グループに所属する小・中・高の学部教員に加えて、校長や養護教諭などいろいろな立場の教員と一緒に授業検討をすることで、様々な視点から斬新な意見を聞くことができた。また、大学とリモートでつながり、大学の先生からも違う視点の考えを聞くことができ、教員一人ひとりが自分自身の授業づくりを見直す機会にもなった。

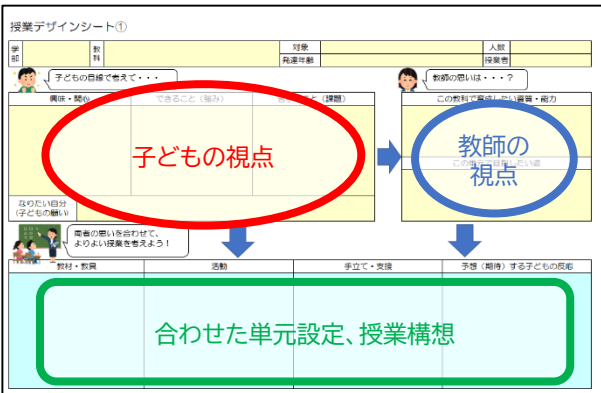


指導案の前段階

いろいろな立場の人たちとの対話

方向性
明確化

授業デザインシートはできるだけシンプルで書きやすいものを目指し、子どもの視点と教師の視点を合わせて授業構想できるように工夫した。初めは授業の流れを考えるものとして活用することを意識していたが、アイデアシェアタイムを重ねる中で、このシートは単元計画の初期に使うことが有効であるとわかった。研究授業だけでなく、普段の授業づくりにも活かせるものであり、実習生の指導などにも活用した。



★デザインシートは本校HPIにて閲覧可能です。



アイデアシェアタイムの効果

新しい取り組みのアイデアシェアタイムは、教員へのアンケート結果よりさまざまな効果があることがわかった。例えば、アイデアシェアタイムは、いろいろな立場の教員が対話する場である。このことにより授業に活かせる新しいアイデアが共有でき、自分の視野が広がってアイデアが蓄積されていった。また、子どもの実態欄に興味関心・強み・課題を記入できるようにしたことで、目の前の子どもの姿を中心に話し合うことができた。さらに、話し合うことで他学部所属する児童生徒の実態把握にもつながった。指導案作成前の段階で話し合った結果、授業提案者の考えが整理され新しいアイデアを柔軟に取り入れることもできた。この場では、自分の意見が否定されることはなく、みんなで授業を作り上げていく作業につながり、同僚性を育む機会にもなった。

アイデアシェアタイムを通して、子ども達も持つ「なりたいたい自分」を、子ども達の実態から教師が推察し、実態により合った題材、教具は何かを話し合ったことで、さらに子ども達の思いに近づくことができたのではないかと考える。教師が「こうしてほしい、こうなってほしい」という思いだけで授業を考えるのではなく、子ども達自身がどのような自分になりたいと考えているのかを実態から考えることが、授業づくりの第一歩になった。子ども達の実態や思いにより近い題材や教具を用いて授業を計画、さらに実践することで、子ども達の主体性が高まったと同時に、授業での対話が活性化し、対話場面が多く見られることにつながった。



様々な対話が
活性化

事後研究会 めっちゃ しゃべれる 研究会

昨年度まで実施していた「Round Study」の手法を活かし、発達課題別グループでの研究会を実施した。「たいわタイムⅠ、Ⅱ」を設定し、それぞれ4人程度の少人数で意見交換をした。たいわタイムⅠでは、授業で見られた「すてきな対話」について、その魅力やシェアタイムで話し合ったことが子ども達にどのような影響を与えていたかについて話し合った。たいわタイムⅡでは、子どもの姿を中心に、今後の成長でどのような姿を目指したいか、またその姿を目指すためにどのようなことが大切かについて、考えを深める話し合いを行った。教師も「対話すること」を意識し、活発な話し合い活動を繰り返し広げた。

研究会の流れ

すてきな対話をさがそう(授業の動画視聴)



授業者からアイデアシェアタイムを受けて工夫したところを紹介。撮影した授業動画を見ながら、各々が感じるすてきな対話を探す時間にした。

グループの発表



各小グループで話題になった意見を発表。同じ内容の対話エピソードを固めて配置したり関係性のある対話同士を並べたりして、授業での対話を整理した。

意見交換、まとめ



たいわタイムⅡで出てきた意見を交流。今後の課題や、発達グループの特徴、学部で取り組みたいことなど、さまざまな意見が飛びかった。

たいわタイムⅠ 「すてきな対話を出し合おう」

ビデオを見て見つけた「すてきな対話」について小グループに分かれて話し合った。授業の中で見つけた「すてきな対話」場面を紙に記入。それをもとに自由に話す時間を設定した。4人程度の人数なので気楽に意見交換できた。



たいわタイムⅡ 「対話について、深めよう」

たいわタイムⅠとメンバーを変え、さらに深い話し合いを行う。今の児童が次の学部へ進学したときどのような姿を目指したいか、研究グループの子どもたちの共通点は何かなど、子どもの姿を中心に語り合った。



アンケートの記入

毎時間アンケートを記入。結果を集計、分析しよりよい研究会を目指した。

まとめの通信を発行

大学との 連携

オンラインシステムを校内研究会でも活用し、Microsoft Teams を用いた連携を進めてきた。これにより大学の先生との距離が近くなり、今まで以上に密な関係を築くことができた。

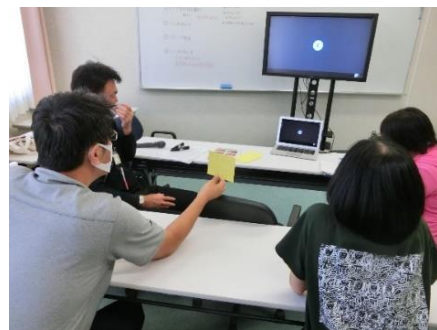
今年度は、発達課題別研究に先立ち、子どもの発達についての研修をリモートで行った。さらに、グループ別の研究会でも、それぞれのグループ担当の先生にグループに所属する子ども達の特徴や課題などを教えていただいた。アイデアシェアタイム、めっちゃしゃべれる研究会にも参加いただき、常に意見を聞くことができるようにした。



「対話」はプロセス？ゴール？



- ・「対話」する姿が見出せた、で終わるのではなく
- ・「対話」を通して子どもたちはどこに「手ごたえ」を感じたのかが大切になる。
- ・そこに繋がる「なりたいたい自分」はそれぞれ異なる。



今回の研究では、あえて対話を3つに分類しながら話し合うのではなく、いろいろな視点の対話に注目して発達段階における対話の特徴を捉えたいと考え、授業での「すてきな対話」探しを行った。先生や友だちとの言葉を使ったやりとりだけでなく、身振りやアイコンタクトなど言葉のないやりとりや自分の中で葛藤する姿も対話であると考え、さまざまな子ども達の姿から対話の場面を探ることができた。

これらの対話について整理していくと、やはり昨年度確認した「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」の3つに分けられること、そして3つの対話からそれぞれの発達段階の特徴が明らかになった。

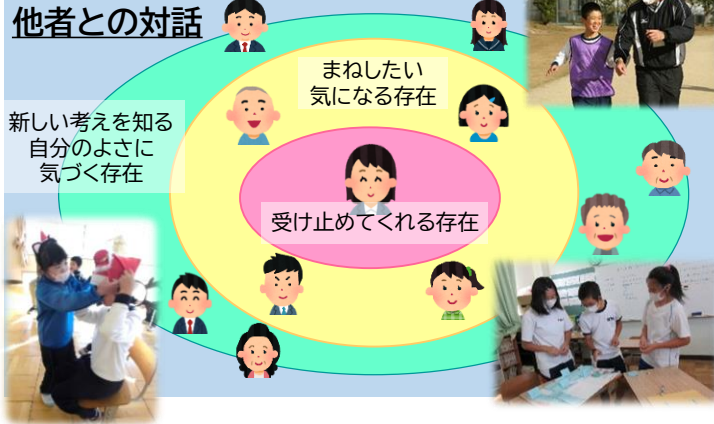


各グループの対象との対話に注目すると、対象は子ども達の身近で生活に根ざしたものから、徐々に選択肢が増え、興味の幅が広がっていることがわかる。Cグループにおいては、自ら対象に課題を見いだす姿が見られた。Aグループの子ども達の中には、興味の幅が非常に狭い子もいる。同じ学習グループの友だちを見ながら、不安を少しずつやわらげ、新しい対象に向かう気持ちを膨らませる姿は、本校ならではの幅の広い学習集団があったからだろう。

子ども達が集中し対象に向かう場面では、会話が少なく黙々と活動に没頭する姿がある。安心感や自信を生み出すためには、対象と対話する時間を教師がしっかり提供し、思う存分対象に浸ることが必要である。

次に他者との対話に注目すると、自分の思いに共感してもらった経験や味わった子ども達は、教師を手掛かりにクラスの友だち、学部の友だち…と徐々に関わる人を増やしていった。1対1の関係性の中で自分を出していた姿も、Cグループでは様々な意見に共感したり比較したりしながら、思考を繰り返す姿が見られた。また、教師からの呼びかけではなく友だちの言葉かけに心を動かし、気持ちを揺さぶられる場面もあった。

他者との対話の中で相手のよさに気づくことは、自分を見つめ直し、共感してくれる他者の存在が自分の思いを発信することにつながる。他者の存在は、子ども達が自分自身に目を向けるために必要であり、他者との関わりの中で客観的に自分を捉え自己との対話に向かうことができるのである。



最後に、自己との対話に注目すると、対象や他者と対話する場面には、必ず自己との対話が存在することがわかる。子ども達は、授業の中でさまざまな思いを自分自身に向けて話しかけている。楽しい活動でのプラスの感情だけでなく、「なんでできないんだろう」と葛藤する対話に教師が共感することは、子ども自身ができない自分を受け止めることにつながる。できない自分を決してダメととらえず、「できるようになるには…」と他者の意見を取り入れたり、対象とじっくり向き合ったりする姿は、まさに効果的な対話と捉えられるだろう。ただ対象を与えていれば対話が生まれるわけではない。また他者がいれば対話が自然と起こるわけでもない。子どもの思いを教師自身がうまくみ取り、他者と関わる時間を



を設定したり環境を整備したりして、自己と対話する時間を確保する必要がある。客観的に自分を見つめることの難しいAグループの子ども達も、できない自分に悔しさを感じたり、できた自分に喜びを感じたりしながら、自己との対話をしっかり繰り返していた。発達段階に関係なく、子ども達は「なりたい自分」を自分の中に秘めており、子ども達の実態に合わせた教材や教具を教師が準備することが、他者や自己との対話の広がりには重要である。

今年度は、思うように研究が進まず悩むことも多かったが、コロナ禍の中でできることを教師自身も対話を通して考えてきた。各グループ5つの実践から、発達段階における子ども達の対話の特徴が明確になったことに加えて、同じ発達段階でも各学部で対話の様子が違い、生活年齢と対話の関係性も見えてきたことは大きな成果である。しかし、「対話」の捉え方を自由にしたことで、本校での「対話」の定義が少し曖昧になってしまっているのが課題だ。

次年度は各グループで確認した「3つの対話」を効果的に授業に取り入れ、自己と対話する姿を大切にしながらさらなる学びの深まりを目指したい。また、縦割りの研究で得た学びを学部で共有し、生活年齢との関係も意識しながら研究を進める。コロナ禍でもできることを少しずつ考えながら、本校独自の授業づくりをさらに深めていきたい。

(文責 巻幡知栄)

どんなすてきな対話が見られたのかな？
次のページから紹介しているよ。



Aグループ 4歳程度まで

Aグループの子どもたちは、自分の興味関心の高いものについては、とことん追求したい思いをもっている。同じことの繰り返しのように見えても、繰り返すことで安心し、もっとやりたい気持ちを高めることができる。しかし、興味関心の幅が狭く、初めてのこと、見通しのもてないことに対しては、不安感が強くなり、取り組みにくい姿が見られる。こうした共通の姿から、児童生徒の興味関心を高める対象（教材・教具）とは何かを探りながら、5つの授業実践研究を行った。

すてきな対話を見つけよう

①小学部ことばかず『すてきな帽子屋さん』

パネルシアター「すてきな帽子屋さん」では、帽子にちなんだダンスや歌などに取り組んだ。集団に入りにくい児童も興味を示し、帽子を手にとろうとした。また、バナナの帽子を見ると、思わず立ち上がり、バナナ体操をするなど、対象へ向かう気持ちを引き出した。

すてき！！

そうでしょ♪

バナナ～！



②小学部ことばかず『モクモクくものレストラン』

パネルシアター「モクモクくものレストラン」に出てくるたくさんの食べ物の形をした雲たち。その中から自分の好きな食べ物を選んで発表する活動。自分の好きなもの、先生の好きなものを選ぶと、先生に持っていき、やりとり遊びを楽しんだ。



先生！
はい、どうぞ！



③中学部家庭『ボタン付け名人になろう』

フェルトの布にボタンで自分のイニシャルを作り、縫い付けていく活動。写真付きの工程表を何度も確認し、集中して取り組む姿につながった。

また、玉留めする場面では、やってみるけど、うまくいかない気持ちを教師と目を合わせて共有できた。



次は
何かな？



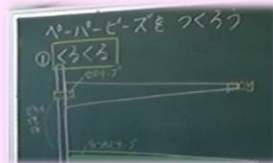
あれ～！？

④中学部美術『ペーパービーズを作ろう』

竹串にポスター等の紙を巻きつけて作るペーパービーズ。擬音語で動作をイメージしやすくし、実態に合わせた教材を用意することで繰り返し取り組む姿につながった。また、ビーズを活用し立体作品を製作し、自分の思いを作品に表現することができた。



ここは青！
こっちは赤！



⑤高等部国数

『次はだれ(なに)かな？
みんなで何人(いくつ)かな？』

PCを操作して、いろんな物の数を数える活動に取り組んだ。画面に同じクラスの友だちの写真が出てくると真剣な表情に変わり、抜けている人はいないか名前をつぶやきながら数えるAさん。自分のクラスの人数をこっそり何度も数え、対象に向き合う姿を引き出した。



このクラスは、
何人かな？



〇〇ちゃんと、
〇〇さんと…

3つの対話で整理してみよう

対象との対話

安心＋興味関心＋生活

児童生徒の興味関心は生活に直結している教材。加えて、いつもの教材を少し変化させた教材や見通しがもてる教材を用意することが、やってみよう気持ちを高め、対象へと向かう気持ちを引き出した。



向かう
気持ち

自己との対話

わかる状況、 じっくり取り組む場

わかる環境を作り、題材にじっくり取り組める場を設定することで、悩んだり、どう表現しようか考えたり、自分の思いを膨らませることができた。



表現したい
思い

他者との対話

ともに味わい、共感してくれる存在 →気づきや喜びの発信

対象と自己との対話を繰り返す中で、生まれてきた気づきや喜びを感じている。その瞬間に、教師が共に味わい、共感してくれる存在になることで、発信を促すことにつながった。



『なりたい自分』になるために(成果と課題)

5つの授業研究を行い、好きな食べ物、自分が使うものを製作する等、子ども達の生活に直結している教材に興味を示し、加えていつもの教材に少しの変化を加えたものや見通しがもてる教材が興味関心を高めるために必要であることがわかった。また、それらの対象(教材、教具)を児童生徒に提示する時、わかる状況づくりが重要である。例えば、擬音語で動作をイメージすることができ状況を作り出し、対象にとことん取り組むことで、自己の中で満足感や達成感、安心感を膨らませ、「私はこうしたい。」という明確な思いへと変化していった。対象と自己との対話を繰り返し、生まれた気づきや喜び、また悩みなどに教師が気づき、寄り添い、ともに味わい、共有する存在になることで、自ら発信する姿につながったと考える。

共同研究者の白石先生より、対話とは教える、教えられる関係だけでは、「応答」はあっても「対話」にはならず、どこかで人間的な対等性が必要ではないだろうかと投げかけていただいた。発信の少ない、本グループの児童生徒たちにとって、言葉だけではない、身振りや視線など子どもの小さな変化に教師が気づく目もち、ともに味わい、共感する存在になることは「対話」を生み出す関係につながる。重ねて、本当にやりたいことなのか、そうせざるをえない衝動なのかを見極め支援することは、本当の思いを引き出すために重要な視点であると考えている。

本校には、小中高すべての学部に通して登山の活動がある。同じ活動に取り組んでいるように見えるが、児童生徒にとっては、毎回捉え方が変わり、毎回新しい挑戦、発見ができる題材である。小学部の頃は、先生と一緒にとりあえず歩く姿だったものが、中学部、高等部と積み重ねていくうちに、受け止めてもらう相手が教師から友だちへ変化し、友だちの姿から目標をもって登る姿に変化することがある。そこには人と人としての対話が自然と生まれる。このように、他の教科でも、素材は同じだが、少しの変化を加えながら他学部にもつながる長い単元の視点ももつことも必要である。子どもの微小な変化を読み取り、分かち合い、対象へ向かう気持ちを育み、自己や他者との対話を活発にできる実践を今後も積み重ねていきたい。

(文責：森あゆみ)

Bグループ 5～8歳程度

Bグループの子ども達は、友だち同士の関わりが増え、おしゃべりをしたり、遊びを共有したりしたいという思いを強く持っている。一方で、その気持ちや考えを言葉でうまく説明できず、トラブルになることが多い。友だちや周囲の人たちに、自分を認めてもらいたいと思う気持ち強い子ども達である。

また、自分で0から物事を考えたり、作り出したりすることが苦手な子ども達が多く、見通しがもてなかったり、「難しい」と思ったりすると活動に向かいにくい様子が見られる。こうした共通の姿を押さえた上で、5つの授業実践研究を行った。

すてきな対話を見つけよう

①小学部図工 『モビールをつくろう』

上からつるすモビールは、どのパーツがどの順番になっても成立する。バイキング形式でパーツを選べるようにしたため、自分の思い通りに並べることができた。友だちの様子も意識しながら、オリジナリティあふれるモビールができあがり、達成感を味わえた。



②小学部生活 『みんなでげきをしよう』

文化祭劇の配役発表の学習で、主役の6年生は期待いっぱい参加した。一番最後に登場する役に選ばれて喜ぶAと選ばれずに落ち込むB。でも、自分の役の良さを先生から聞くうちに、頑張る気持ちに切り替わり、最後は笑顔でハイタッチする姿があった。教師との対話を通して自己との対話が見られた場面であった。



③中学部家庭 『ウォールポケットをつくろう』

整理整頓を意識してウォールポケット作りに挑戦。何を入れるか、どうやって作るか(手縫い? ミシン? ボンド?)を考える場面で、自然と肩を寄せ合って相談していた。友だちのつぶやきからアイデアをもらい、作りたいものがイメージできると作業もどんどん進み、仕上がりに満足げな姿が見られた。



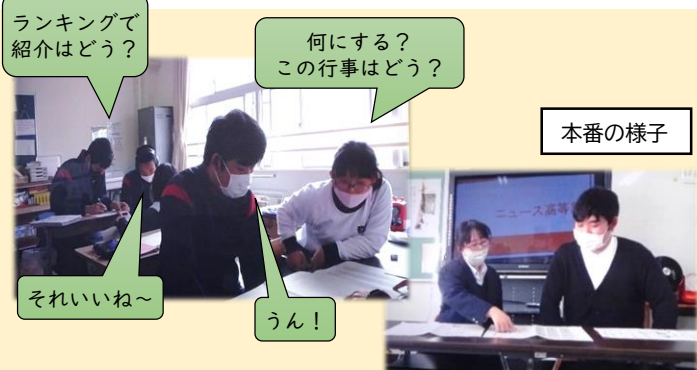
④中学部数学 『かぞえよう くらべよう』

紙コップを積んで高さを測ったり、数を数えたりしながら数に親しむ学習。紙コップは扱いやすく、不快な音もしないので安心して対象との対話ができる。100個以上の紙コップを目の前にして、やってみようという姿をどんどん引き出すことができた。どの生徒も黙々と対象と向き合った。



⑤高等部国語 『ニュースキャスターになろう』

ニュースキャスターになって学校の出来事を紹介する学習。ニュース番組は生徒たちにとって身近で、目指す目標が分かりやすく、なりきって楽しむ姿が見られた。「どんなことを伝えよう?」と相性の良い仲間同士で相談する中で、自分の気持ちとも向き合い、読み上げる原稿ができあがっていった。完成した番組を見た他グループの友だちに「すごいな」「おもしろかったで」と認めてもらえたことも嬉しい気持ちや意欲につながった。



3つの対話で整理してみよう

対象との対話

安心＋自己決定→主体性

「できそう!」「やってみたい!」と思える教材や導入の工夫(動画等の活用)で、安心感をもって対象に向かうことができた。0からではなく、選択肢の中から「ぼくはこれ!」と自己決定することで、主体的な姿を引き出した。



他者との対話

見える・気づける距離

+

相談しやすい環境 →やりとりの活性化

お互いの様子が見える距離感で活動したり、話し合える環境や雰囲気を設定することで、子ども同士のやりとりが活性化した。



自己との対話

「どうしよう?」 葛藤する場面



新しいアイデアや 考えとの出会い

一人で考えるだけでなく、対象と向き合ったり、先生や友だちとのやり取りの中で自己決定や自己変容に向かう姿を見せていた。

『なりたい自分』になるために (成果と課題)

5つの事例研究を通して、子どもの興味や関心、得ている知識や技術の実態を踏まえた題材を設定し、「これならできそう!」「やってみたい!」と思える導入を工夫(動画やパワーポイントの提示)することによって、主体的に活動に向う姿が引き出した。また、どう取り組むかを自己決定できる選択肢の設定、教師や友だちと相談しやすい距離感や環境の設定を行うことで、対象や他者との対話が活発化し、自己との対話(自己決定や自己変容に向う姿)へ導くことができた。

研究の当初は、卒業後の姿として「なりたい自分」という明確なゴールを設定し、そこに向かうために各教科等での単元や授業があるようなイメージがあった。しかし、事後研究を通して「なりたい自分」を捉え直した。Bグループの子ども達が卒業後の姿をイメージすることは難しく、ぼんやりとした状態にある。明確なのは、今の気持ちや状態である。目の前にいる子ども達が何を思い、願っているのか、現状の「なりたい自分」を教師が推察し、授業を展開する。授業後の少し成長した子どもの新たな思いや願いを推察し、次の授業を展開していく。この積み重ねの中で、子ども達が自分に向き合い、自己理解を深めていく過程を通して、ぼんやりとしていた進みたい方向性である「なりたい自分」が明確になるのではないかな。そのためにも、授業の中で、対象や他者との対話と自己との対話の行き来を活発に展開させることが大事である。



Bグループの子どもの発達段階は、自分の意見と相手の考えとの間で折り合いをつけたり、自己調整ができたりする段階である。集団の学びにおいて、対象や他者との対話の活性化を促し、自己との対話(自己決定、自己調整)へとつながる実践を積み上げていきたい。(文責:和田佑子)

Cグループ 9～14歳程度

Cグループの子ども達は、言葉での指示や会話のやりとりで内容を理解し、目的を意識した活動ができる。生活年齢が上がると、授業に向かう心構えを持ち、自己調整できる力も育ってきているため、少し難しい活動や根気が必要な作業などにも向かうことができる。具体物が無くても言葉でイメージがもてるようになり、抽象的な思考につながっていくが、思考の手掛かりになるような丁寧な支援や手立て、題材の工夫が必要である。対話に着目し、5つの授業実践研究を行う中で、Cグループならではの気づきや課題も見えてきた。

すてきな対話を見つけよう

①小学部ことばかず

『おこづかいをもって、買い物に行こう』

手作りすごろくの教材を使い、金種やお金の計算を学ぶ学習。買い物のマスではお小遣いが減るので、そこに止まるとみんなで一喜一憂していた。友だちの計算をしてあげたり、勝ち負けにこだわっても気持ちを調整したりしようとする姿から、自己との対話が見られた。

高いのこーい！



おこづかい
ゲット！

②中学部国数 『昔話をアレンジしよう』

昔話（3枚のお札）をアレンジして文化祭劇のあらすじを作る授業。相槌をうったり、「へ～そうなんや」と、相手の意見に共感して聞く姿に他者との対話があった。友だちの意見を聞いて自分の意見を変更する場面も。本筋から逸れないようにするには、教師が話の方向性を舵取りする必要があった。

あ！山行って、
川に落ちて、海に流れていくのは？



お札を使って
透明人間になる！

(舞台は、山・川・海、どう思う?)
いいんじゃないかなあ～

③中学部家庭 『栄養バランスを考えた献立を考えよう』

各自が考えた献立が給食に採用されることになり、献立のテーマをみんなで話し合った。野菜たっぷりのメニューにしたいので「モリモリ」という言葉を入れたいA。「モリモリ」に違和感を覚えるBとCは、Aの意見を頭から否定するのではなく、周りの様子を見ながら代案を出した。自分の意見を主張する姿から対話が生まれた。

「食べ物で風邪とかから
体を守ろう」とか…



モリモリが
いいと思う

モリモリより
たくさんがいいな

④高等部美術 『アフリカンシンフォニー』

アフリカの景色を題材にした共同制作の取り組み。導入の写真、絵、音楽等で生徒達は「すごい！やってみたい！」と、イメージを広げていた。共同制作という設定が対話を生み、生徒は絵を通して対話し、イメージの共有をしようとしていた。思い通りに上手く描けなくてもどかしい…という自分との葛藤もあった。

こうしたらキリマン
ジャロに見えるかな…



夕焼けの色も揃え
た方がいいかな？

⑤高等部数学 『きみは解けるかな？』

マジックショーのワクワクする導入から始まり、誕生日を当てる計算トリック（手品）のタネを考えさせる授業。その後生徒がオリジナルの式を作成した。生徒達は「トリックどうなってるの？」「自分で式を作りたい」と、電卓を叩いたり、紙に書いたり消したりしながら、既存の知識をフル活用して計算式に黙々と取り組んでいた。思考を巡らせる数学的な考え方ができるようになることと、そこから論理的思考を働かせることにつながればというねらいがあった。数学手品の理解や、式の組み立てで苦戦する生徒もいたが、粘り強く自己と向き合い、思考する姿があった。

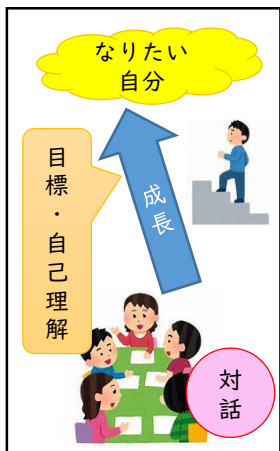
どんな問題に
しようかな…

僕のマジック
ショー！

こうやって考えてみたら？



3つの対話で整理してみよう



他者との対話

他者の発言を受け止める



自分の思いを言語化して発信する

友だちの発言を聞いて共感したり、意見を変更したりする姿があった。話し合うテーマについて言葉でイメージを共有し、相手を意識しながらも、自分の主張を述べることで、互いの意見を調整し、結論へ導くことができた。会話の中で考えをまとめ、深められた。



対象との対話

思考にアプローチする
手応えのある題材設定

題材が生徒達にとって魅力的であることは、取り組む原動力になる。

「考えたストーリーが台本になる!」「共同絵画を作る!」「数学マジックをしてみたい!」少し難しいけれどやってみるといふ、気持ちを引き出す題材に、自ら向き合う過程で意欲や集中力が高まり、対象との対話が深まった。

自己との対話

憧れや挑戦したい
目標に自ら向かえる

想いはあるのに、それを上手く表現できない自分と葛藤し、粘り強く考えたり、何度も書き直す姿があった。

少し上の目標を目指す中で、自分との葛藤があり、そこに自らチャレンジしたり乗り越えたりすることで成長していく姿が感じられた。

『なりたい自分』になるために(成果と課題)

対話に着目して5回の授業研究会を行う中で、Cグループならではの対象、自己、他者との対話を見出すことができた。Cグループの子ども達は、言葉で内容を理解し、イメージを共有しながら話し合いをすることができる。他者との対話において、まず相手の意見を受け止め、それに共感したり、違いを認めつつも自分の意見を主張したりして、そこから新たな結論を導くことができた。テーマに沿った話し合いを成立させるためには、道筋を示す教師の支援も必要である。生活年齢を重ね、少しずつ抽象的な思考を獲得しつつある子ども達にとって、会話によってイメージを共有し、自らの考えを反芻することで考えを深めていく過程(自己との対話)は大切に考える必要がある。また、子ども達は、安心できる集団の中でこそ自分の意見を述べることができ、力を発揮できる環境の大切さも認識できた。

小、中、高と進むにつれ、気持ちを調整し、自ら課題に向かう力が育ってくる。憧れや、挑戦したい目標を持つことで、苦しくても自ら向かおうとする姿(自己との対話)も出てくる。高等部は卒業後を視野に、具体的な目指す姿を意識し始める段階にある。自分を客観的に捉えつつある生徒達は、上手くできない自分と葛藤する姿もあった。乗り越えていく姿勢とともに、今の自分を受け入れ、認める自己理解の育ちも大切にしたい。

Cグループの子ども達にとって、今よりも少し難しい目標設定をする中で、自分で考えて課題を解決できる力をつけていくことが必要であると考えている。主体的に取り組む姿から自信が生まれ、自ら「なりたい自分」を見出ししていく原動力となる。また、この発達段階の子ども達は、物事を抽象的に捉えられるようになってきているが、授業の中で論理的な思考につなげるにはまだ課題がある。論理的な思考の芽を育てるためには、生活経験を豊かに培う中で、思考の手掛かり、手立てを十分に準備し、なぜ、どうしてという根拠や理由を考えられる支援をすることが大切である。目指す姿を意識した学びを仕組み、分かるようになりたい、できるようになりたいという願いに応えられる授業実践を今後も継続していきたい。

(文責: 梶谷素女)

実践 ライブラリー (本校HP)の 紹介

今年度行った研究授業を中心に、簡単な単元計画、授業のポイント、子ども達の反応などを1枚のシートにまとめ「実践ライブラリー」としてHP上に公開しています。
『インターネットで検索しても、発達年齢に合わない…』『一時間の授業ではなく、単元での流れが知りたい!』など、お困りの方はおられませんか?今回の年報では紹介できなかったことを、発達年齢別に掲載しています。みなさんの授業に少しでもお役に立てれば幸いです。
ぜひ一度、ホームページをご覧ください。



実践ライブラリー: 高等部 国語科 「ニュースキャスターになろう」

自分の好きな事について誰かに話したい
何て伝えたいのかわからない

相手に、より分かりやすく伝える力をつけてほしい

実践ライブラリー: 中部美術科 「ペーパービーズを作ろう」

見通しが重要。手先が器用。新しいことに興味がある。

自分の好きな表現方法を知り、どんどん制作したい思いを膨らませたい。

① どれに巻く? 竹串? 爪楊枝? 割り箸?

3種類の素材を用意して、巻き付ける芯はどれが良いのか体験して選ぶ活動しました。いろいろ試すことで、巻き付けやすさや見え方が変わることを実感できました。

② いっぱい作ろう

芯を竹串に絞って、たくさん作ることを楽しみました。つなげてプレジレットを作りました。

③ いろんな紙で作ってみよう

巻き付ける紙の種類を広げました。

④ 立体作品をつくろう

たくさん作ったペーパービーズと紙粘土に組み合わせて、オリジナルの宝島が完成しました!

ペーパービーズのポイント

紙は手に入りやすく、軽いため、たくさん作って作品づくりに生かれます!
また、色も持ち豊かで、紙に合わせられます。

④ ニュース番組を撮影しよう

ニュースキャスターになって原稿を読むところを撮影しました。高等部の友だちにニュース番組を披露しました。

おすすめポイント

単元を通して「今週の高等部ニュース」を授業のはじめに読むことで、ニュースキャスターの意識の使いのやがしに慣れることができようになりました。

子どもの反応

○○んの読み方がかっかくてすこっぴです!まだニュースを讀みたいだよ

令和3年度に研究発表大会(オンライン開催)を予定しております。
一次案内は6月ごろを予定しています。ぜひご参加ください。

編集後記

新型コロナウイルス感染症に振り回された1年。本校でも、今できることは何か、常に模索し協議しながら進めてきた1年でした。ただ、研究に関して言いますと、Teamsを利用して、グループ研究の場にも障害児教育研究室の先生方に常に参加していただく形をすることができました。私たちの実践に対して、科学的な裏付けや助言を常にいただける環境にあったことは、私たちの学びを深めることにつながっていきました。この場をお借りして感謝申し上げます。また、ここまで研究を進めてこられたのは、「なんでもやってみよう」とする意欲的な研究主任および研究部の力があつたからこそとも思っています。今まで通りができない日々ではありましたが、児童生徒の今の姿から常に授業を考える特別支援学校教員の強みが発揮された1年でもあったと感じています。
しかし、まだまだ根拠に弱い実践の段階です。これを科学的なものにし、次年度の研究発表大会でまとめていくために、今後も教職員一同努力し、学び続けていきたいと思っております。皆様方の忌憚のないご意見とご助言をいただければ幸いです。

滋賀大学教育学部附属特別支援学校
副校長 細谷亜紀子

研究同人

校長 藤田昌宏 副校長 細谷亜紀子
研究主任 巻幡知栄 副主任 和田佑子
実践ライブラリー担当 菊池友恵

- 発達課題別グループ(☆印=チーフ)
- 【Aグループ(1.5歳~4歳程度まで)】
☆森あゆみ 重田美和 河原林毅 寺田慧 武田義弘
成田豊 森下靖視 巻幡知栄 細谷亜紀子
- 【Bグループ(5~8歳程度)】
☆和田佑子 志賀元紀 小松未央 米山知祐 森野達也
花木誠 都賀敦子 山下桃子 藤田昌宏 山本祐美
- 【Cグループ(9歳~14歳程度)】
☆梶谷素女 山本顕典 福谷芳恵 菊池友恵 谷智代
堀口毅 下紺晃季 石部和人 定森多貴 木村明子
- 研究協力 滋賀大学教育学部障害児教育専攻
Aグループ助言: 白石恵理子 羽山裕子
Bグループ助言: 江原寛昭
Cグループ助言: 窪田知子 松島明日香